

青春スクロール

母校群像記

<http://t.asahi.com/dnnn>

将来へエネルギーをため「力」培う

慶応義塾前塾長で日本学術振興会理事長の安西祐一郎（69、1965年卒）も慶応高校（塾高）のOB。「塾高時代は打ち込むものがなく、空白の3年だった」と吐露する。「ちよろど、さなぎの時期。将来に向けてエネルギーをためていた」。周



「あの雑然とした雰囲気は好きだった」と振り返る安西

慶応高校 9

りには種々雑多な人がいて、互いを認め合う空気が好きだった。数年前にインドの旧市街地に行った時、ふと塾高のことを思い出したという。

TBS系の報道番組「NEWS 23」のアンカーで毎日新聞特別編集委員の岸井成格（71、63



「旺盛な好奇心は塾高時代と変わっていません」と岸井

年卒）は、相撲部やESSなどいくつかの部活に入り、生徒会長も務める「スーパー高校生」だった。生徒会長の時、元塾長の小泉信三氏を講演に呼んだ。

普段はうるさい生徒たちが、シーンと静まり返って話を聞いていた。先生たちも、小泉氏を呼んだことに驚いた。「してやったり、という感じでしたね」。

ジャーナリストとしての好奇心や行動力は、このころから培われていたようだ。

漫画家で恐竜研究家のヒサクニヒコ（71、62年卒）は、演劇

「演劇部で学んだことは今も役立っている」とヒサ



部に入った。芝居のポスターを描いたり、入場券を他校に売りに行ったりした。パンフレットを作るのに、印刷屋に交渉にも行った。「夜遅くまで学校で舞台装置を作っていた時、用務員のおじさんから人生についていろいろと教わった。普通の高校生では体験できないことをさせてもらった」と振り返る。

若手のホープもいる。小説家の柴崎竜人（39、95年卒）は2

004年に三田文学新人賞をとって作家デビューした。高校時代はアイスホッケー部に所属し、高校総体にも出場した。しかし、高校総体にも出場した。しかし充足感は薄く、友だちとの関係の中で疎外感を感じたこともあった。心の穴を埋めるように、音楽や映画、小説に熱中した。そして高3の時、初めて彼女ができた。「それまでの自分の価値観をガラリと変えてくれましたね」。こうした経験は、



柴崎は映画やドラマの脚本作りも手がける

小説作りにもつながっている。森アーツセンターで展覧会を企画する杉山央（41、93年卒）は、高校時代、渋谷や原宿など街を歩くのが好きだった。インターネットがない時代、歩き回り、珍しいスニーカーや古いレコードなどに会えるのが喜びだった。「街をキャンパスにして遊びたい、と思うようになった」。今年春、六本木の街全体を使ったアートイベントを企画し、成功裏に終えた。

慶応高校は今回で終わります。佐藤陽（慶応高校85年卒、空手部）が担当し、敬称略で紹介しました。次回は「Y校」で知られる横浜商業高校です。